

2024 年度「教学と現代」(2025 年 3 月 27 日)

『天理教台湾伝道史』刊行記念 台湾伝道を振り返る」

天理総合人間学研究室、天理ジェンダー女性学研究室、伝道史料室(第9回伝道フォーラム)、そして天理教台湾伝道史編集委員会との共催により、3月27日、2024年度「教学と現代」として標記の特別講座が開催された。

天理教の台湾伝道の歴史は、戦前は日本統治時代、戦後は中華民国時代と、大きな政治体制の変化と激動の時代状況の中をくぐり抜け、今日に至っている。昨年(2024年)11月17日には、台湾伝道庁創立90周年記念祭が盛大に執行された。天理教の海外伝道として最も長い歴史をもつ台湾伝道史においては、先人たちのさまざまな苦労があった。その一端について広く紹介すべく、2月26日に刊行された『天理教台湾伝道史』(編集・発行:天理教台湾伝道史編集委員会)の編集委員5名により、それぞれ発表が行われた。

第1講「伝道史の編集の経緯」(金子昭・研究員)では、橋本武徳12代台湾伝道庁長の時代に遡る編集前史から始まり、2013年11月におやさと研究所で第1回編集会議が行われて以来、コロナ禍の困難な時期をはさんで10年以上に及んだ『天理教台湾伝道史』編集の経緯について報告された。

第2講「戦前の台湾伝道史」(山西弘朗・香川大学非常勤講師)では、戦前の天理教台湾伝道が植民地における布教伝道であったこと、「おさしづ」の伺いにより山名大教会が組織的伝道を行ったことなどについて報告が行われた。山西氏は、戦前においては布教対象が内地人(日本本土出身者)と本島人(台湾の現地人)とに分かれる傾向があり、戦後日本人引き揚げ後も存続できた嘉義東門教会などは本島人布教に力を入れていたことを指摘した。

第3講「戦後の台湾伝道史」(高佳芳・元天理教海外部翻訳課員)では、第2次世界大戦の終戦により日本人が引き揚げ、台湾伝道庁はじめ多くの教会が接收されたこと、また戦後の中華民国政府により戒厳令が敷かれ、伝道史において空白の時期でもあった当時の苦難に満ちた状況について報告が行われた。高氏は、台湾伝道庁跡地の戦後接收後の権利譲渡について土地謄本の調査を元にして説明し、また近年、有数の木造日本建築として現存する嘉義東門教会神殿が嘉義市の「市定旧跡」に指定されたことなどを紹介した。

第4講「天理教婦人会の伝道」(堀内みどり・研究所主任)では、1896年(明治29)、古谷マツ姉から始まった女性布教師たちの台湾伝道の状況、また女性の海外伝道者の育成を後押しした天理教婦人会の事業について報告された。報告の中では、中山たまへ婦人会初代会長が1930年(昭和5)6月に台湾を巡教されたことが大きな契機になって、その翌年には天理教婦人会が布教師を台湾に派遣するに至り、川口ハル姉が臺婦講(戦後、臺北臺婦分教会として復興)の中心となった過程について紹介した。

第5講「台湾伝道史の一齣 中西牛^{うしお}郎と高見庄蔵」(佐藤浩司・天理大学名誉教授)では、知られざる台湾伝道史の一側面として、海外伝道を志した船場大教会布教師の高見

庄蔵が天理教校の恩師だった中西牛^{うしお}郎(1859～1930)を慕って台湾に渡航したエピソードについて報告が行われた。中西牛郎はもとは宗教学者・仏教学者であったが、後に「明治教典」の編述にも従事、自らも天理教に入信した。天理教校講師を勤めた後に台湾に渡り、総督府の嘱託として活躍した。高見庄蔵は台北の中西牛郎宅に書生として住み込み、その薫陶を受けた。彼は帰国後、1910年(明治43)ロンドン布教に出発したのである。

以上5名の発表の後、フロアを交えて自由な質疑応答が行われた。最後に、三濱善朗編集委員会代表が挨拶を行い、自らの台湾伝道の経験を振り返りつつ、現時点で到達できた最善の成果が『天理教台湾伝道史』であると語り、力強く締めくくった。(金子昭記)



講師(伝道史編集委員)を囲んで

写真展「天理大学 100 年」を開催

おやさと研究所では、天理大学同窓会(ふるさと会)が所蔵している写真パネルをメインとした標記写真展を、同会および天理大学年史編纂室の協力をえて開催した。南右第二棟1階ロビーの展示スペースを会場とし、5月1日から7日(最終日は13時まで)まで展示し、期間中に133名が来場した。今回は第1期で、秋には、第2期:9月13日(土)～28日(日)での開催を予定している。

今回は、主に天理外国語大学設立時からの建物の変遷、キャンパスの変化、学生生活(学生寮や大学祭など)、町の様子など、大正末期から平成20年までの写真を展示した。

また、本年4月23日に創立100周年を迎えた本学における100周年記念の各種行事の報告や行事予定、各学部などの活動についてのポスターを展示し、現在の天理大学の様子を知ってもらえるようなコーナーを設けた。

第2期では、一部の写真パネルを入れ替え、より興味深い展示にしたいと考えています。卒業生の方々をはじめ、多くの方の来場をお待ちします。(堀内記)